



さろまげんき王国

保健福祉課保健推進係

☎ 2・1212

働き盛り世代の風しん予防く自分を守り、次世代の子ども達を守るく

以前は、幼児や低学年の子どもにみられた風しんですが、ここ数年は成人男性で発症するケースがみられ、大人の風しん予防が課題となっています。

風しんとはどんな病気？

風しんウイルスによって起こる急性の発疹性感染症です。主な症状は、「体のだるさと発熱」「ポツポツとした赤い発疹」「耳や首の後ろのリンパ節の腫れ」などです。子どもは比較的軽微ですが、まれに脳炎や血小板減少性紫斑病といった合併症がみられます。また、大人がかかると発熱や発疹の期間が子どもに比べて長引きやすく、関節痛が出る場合もあります。感染者の咳やくしゃみによる飛沫（唾液のしぶき）などにより、人から人に感染し、発疹の出る1週間前から発疹が出たあと1週間くらいまで感染力があると言われています。ウイルスに感染しても症

状が出ない人が15〜30%程度いるとされ、知らない間に他の人に感染させる可能性もあります。特に問題になるのは、妊婦さんに感染することです。

妊婦が感染すると何が問題？

妊娠20週頃までの妊婦が風しんにかかるると、胎児が風しんに感染し、難聴、心疾患、白内障、その他心身の発達の遅れ等の障がいをもった赤ちゃんが生まれる可能性があり、これらの障がいを『先天性風しん症候群』と言います。先天性風しん症候群にかかるリスクは特に妊娠初期で高く、妊娠1ヶ月で風しんにかかる50%以上、妊娠2ヶ月で35%程度、妊娠3ヶ月で18%程度とされています。予防のためには妊娠する前にワクチンで免疫をつけておくことと、周りの人も含めて感染を予防する事が重要です。

なぜ大人の風しんが増えているのか

公的な予防接種が開始された当初は女子中学生に限定されており（年代別予防接種状況は下表参照）、公的な予防接種を受ける機会が無かった昭和37年4月2日から昭和54年4月1日の間に生まれた男性で、風しんに対する免疫がある事を示す「抗体保有率」が他の年代より低くなっています。乳幼児を除く女性や他の年代の男性の抗体保有率は約90%以上ですが、この世代の男性は約80%となっています。

平成30年7月以降、特に関東地方において患者数が増加し、患者の中心は30歳代から50歳代の男性となっており、今後の流行の拡大を防ぐため、国ではこの世代に対する風しん対策を進めています。

【年代別の風しん定期予防接種回数】

生年月日	H2.4.2以降	S54.4.2～ H2.4.1	S37.4.2～ S54.4.1	S37.4.1以前
男性	2回 ※1	1回 幼児または 中学生時に 個別接種	未接種	未接種 ※大半が自然感染
女性			1回 中学生時に 集団接種	

※1 平成20年～24年の5年間は、特例措置として中学1年生（第3期）および高校3年生相当（第4期）に2回目の麻しん風しん混合ワクチンを実施しています。

4月から実施する風しんの追加的対策について

風しんの抗体保有率が低い年代の男性を対象に、風しん抗体検査、定期予防接種を原則無料で受けられる体制が整備されます。

◆実施期間：2022年3月31日までの3年間

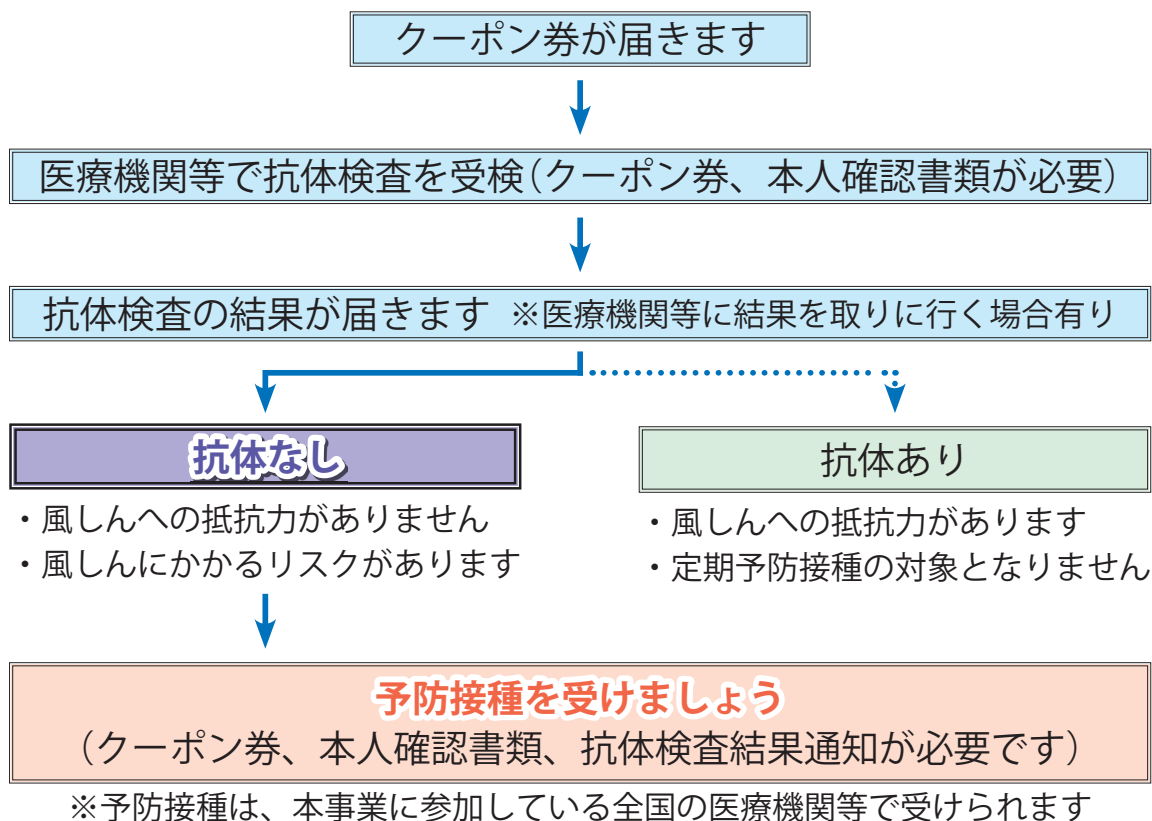
◆対象者：昭和37年4月2日～昭和54年4月1日生まれの男性

◆助成：町から対象者へ抗体検査、予防接種の無料クーポン券を送付します

※1年目の2020年3月までは、昭和47年4月2日～昭和54年4月1日生まれの男性に対して町からクーポンを送付します。

※クーポン券が送付されない対象者についても、希望すればクーポン券が発行され、抗体検査を受ける事ができますので、お問い合わせください。

抗体検査・予防接種の大まかな流れ



抗体検査・予防接種は「クリニックさろま」で実施できますが、他に実施可能な医療機関等や「風しんの追加的対策」の詳しい情報は厚生労働省のホームページに掲載される予定です。

風しんの追加的対策

検索



風しん予防は、個人だけでなく家族、職場の仲間、生まれてくる赤ちゃんの健康を守ることに繋がります。該当となる年代の方は役場のお知らせの他、厚生労働省のホームページ等で内容をご確認ください。